

名作展「川端龍子の描き出した世界 生誕140年を迎えて」の開催
2025年3月29日（土）～6月22日（日）



川端龍子《草の実》1931年、大田区立龍子記念館蔵



川端龍子《香炉峰》1939年、大田区立龍子記念館蔵

【期間限定展示】

3月29日（土）～

4月13日（日）

伝依屋宗達《桜芥子図襖》
（17世紀）を期間限定で
公開します。



■開催情報

会 期：2025年3月29日（土）～6月22日（日）

開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）

休 館：月曜日（5月5日（月・祝）、5月6日（火・振）は開館し、5月7日（水）に休館）

入 館 料：一般200円、中学生以下100円

※65歳以上（要証明）、未就学児及び障がい者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料。

※4月6日（日）は、第35回馬込文士村大桜まつり開催に伴い入館料無料とし、龍子公園
を開館時間中、特別開放。

■ 展覧会概要

日本画家・川端龍子（1885-1966）は今年、生誕 140 年を迎えます。昨年、富山県水墨美術館、岩手県立美術館で開催された「川端龍子展」は、今年さらに島根県立美術館、碧南市藤井達吉現代美術館（愛知）に巡回します。また、龍子記念館および記念館に隣接する旧川端龍子邸が、国の登録有形文化財（建造物）に登録され、その功績は多方面にわたって評価が高まってきているところです。そこで本展では、龍子の生誕 140 年を記念して、当館が所蔵する代表作を中心に、龍子が生涯にわたって描き出した世界を紹介します。

親交のあった日本画家・奥村土牛（1889-1990）は、龍子の画家としての歩みを回顧し、「自分の思うままに、その生涯の仕事をしつづけて散った」と評しています。同様に伊東深水（1898-1972）も、「敢然として自分の主義主張を曲げずに、最後までやり通した」と述べています（注1）。両巨匠の語る龍子が成し遂げたこととはいったいどのようなことだったのでしょう。1885（明治 18）年 6 月、和歌山に生まれた龍子は 10 歳の頃に家族と上京し、後に画家を志します。20 代の時の龍子は、挿絵画家として生計を立てつつ、いつの日か洋画家となることを目指していました。しかし 1913 年（大正 2）年、28 歳の時に渡米したことを契機に日本画家へと転向します。そして、2 年後には横山大観らが率いていた再興日本美術院（院展）の展覧会に入選し、院展の花形役者と呼ばれるほどの人気を集めました。しかし、龍子は大画面の作品制作を追求するため、1928（昭和 3）年に院展を脱退、翌年に自身の美術団体・青龍社を設立しました。以降は「会場芸術」を主張し、大画面に時代を反映させた画題を描いて日本画家として一世を風靡しました。そして、毎年秋の青龍展において大作を発表することを自らに課し、その信念は戦争が激しくなっても変わることはありませんでした。戦後、龍子の青龍社での制作が称えられ、1959（昭和 34）年には文化勲章を受章、1963（昭和 38）年には自らの発案で造り上げた龍子記念館を開館しました。晩年には、作家・佐藤春夫にして、「明治以来、今日までのわが芸術界にあって名匠や妙手なら決して少なくもないが、真に巨匠と呼ぶにふさわしいのは、ただひとり川端龍子ぐらいなものではないだろうか」と称えられたのでした（注2）。

本展では、龍子の画業を「大作主義への挑戦」、「青龍社の設立と『会場芸術』」、「晩年の作品制作」の 3 期に分け、その画業を振り返ります。龍子が大画面の作品を追求し始めた記念碑的作品《一天護持》（1927 年）や日中戦争下に戦闘機を描いた《香炉峰》（1939 年）、戦争の悲惨さを象徴的に表した《爆弾散華》（1945 年）、自らがデザインした垣根を作品化した《龍子垣》（1961 年）等の代表作を通じて龍子の描き出した世界をお楽しみください。また、本展では期間限定で、龍子が愛蔵していた伝 俵屋宗達《桜芥子図襖》（江戸時代、17 世紀）を展示します。桜の季節に、琳派の絢爛な作品をぜひご覧になってください。さらに、2023（令和 5）年に当館初の滞在制作を行った、谷保玲奈の作品展「け這（は）う」を併催します。旧川端龍子邸の画室で現代の作家が感じとったイメージを描いた作品が、画室と展示室に新たな彩りを加えます。

注 1 奥村土牛「悔いなき画作の生涯」、伊東深水「川端さんの気概」『三彩』増刊 202 号、1966 年 6 月

注 2 佐藤春夫「巨人の足あと＜龍子の歩み＞展を見る」『朝日新聞』1962 年 6 月 14 日

谷保玲奈の作品展「け這う」を併催（全会期）

2023（令和5）年に当館初の滞在制作を行った、谷保玲奈の作品展「け這（は）う」を本展において併催します。旧川端龍子邸の画室で現代の作家が感じとったイメージを描いた作品によって、画室と展示室に新たな彩りが加えられます。

画室内の作品鑑賞

画室内の作品については、1日3回の公園案内の際に外周からご覧いただけるほか、会期中の金、土、日曜および祝日の11:30~12:00、13:30~14:00に画室内に入ってご覧いただけます。



■関連イベント

○ギャラリートーク

学芸員が出品作を解説します。

開催日：3月30日（日）、4月20日（日）、5月5日（月・祝）、5月25日（日）、
6月22日（日） 各日13:00から（40分程度）

○龍子公園（旧宅・アトリエ）のご案内

当館に隣接する龍子設計の旧宅とアトリエが、解説つきでご見学できます。
開館日の10:00、11:00、14:00から（30分程度）

○谷保玲奈展示「け這う」 アトリエ内の作品鑑賞

会期中の金、土、日曜および祝日 ※イベント開催時を除く。
11:30~12:00、13:30~14:00（各回先着15名）

○谷保玲奈展示「け這う」トークセッション

開催日時：5月18日（日）13:30~15:00

谷保玲奈×岡安賢一（ビデオグラファー） 小金沢智（キュレーター）×木村拓也（当館副館長）

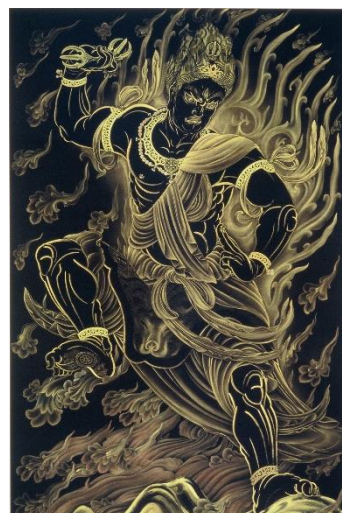
○地域連携事業「風薫る美術館コンサート」

開催日時：5月31日（土）18:30~19:30

会場：展示室内

■主な出品作品（全て大田区立龍子記念館蔵）

○大作主義への挑戦



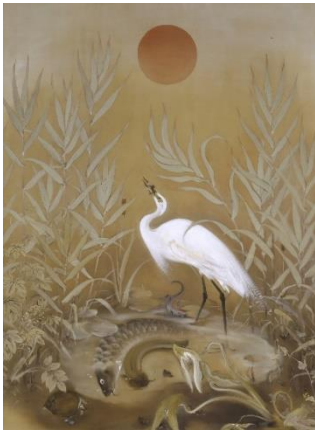
左・川端龍子《使徒所行譚》1926年、大田区立龍子記念館蔵

右・川端龍子《一天護持》1927年、大田区立龍子記念館蔵



川端龍子《神変大菩薩》1928年、大田区立龍子記念館蔵

○青龍社の設立と「会場芸術」



左・川端龍子《請雨曼荼羅》1929年、大田区立龍子記念館蔵
右・川端龍子《立秋》1932年、大田区立龍子記念館蔵



川端龍子《草の実》1931年、大田区立龍子記念館蔵



川端龍子《香炉峰》1939年、大田区立龍子記念館蔵

○晩年の龍子の作品制作



左から 川端龍子《爆弾散華》1945年、大田区立龍子記念館蔵
川端龍子《倣赤不動》1946年、大田区立龍子記念館蔵



左から 川端龍子《水中梅》1947年、大田区立龍子記念館蔵（4月15日以降に展示）
川端龍子《水巴》1950年、大田区立龍子記念館蔵（4月15日以降に展示）
川端龍子《百子図》1949年、大田区立龍子記念館蔵（4月15日以降に展示）
川端龍子《寒泳》1964年、大田区立龍子記念館蔵



川端龍子《阿修羅の流れ（奥入瀬）》1964年、大田区立龍子記念館蔵



川端龍子《龍子垣》1961年、大田区立龍子記念館蔵

■ 広報についてのお問合せ

本展紹介のための作品画像の使用に関しては、下記までお問い合わせください。

※作品画像のほか当館の外観や龍子公園の画像もご用意いたします。

※使用に際しては、掲載内容・放映内容を事前に確認させていただきます。

※使用后、掲載誌および放映が記録されたメディアを見本として当館までご送付ください。

【お問合せ先】

大田区立龍子記念館 〒143-0024 東京都大田区中央 4-2-1

TEL & FAX : 03-3772-0680 学芸員 木村拓也

■ アクセス

● JR京浜東北線大森駅西口から

東急バス4番「荏原町駅入口」行乗車、「臼田坂下」下車、徒歩2分

● 都営地下鉄浅草線 西馬込駅南口から

南馬込桜並木通り（桜のプロムナード）に沿って、徒歩15分

